# ロークァットは二度笑う。

竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロークァットは二度笑う。

【Ｎコード】
Ｎ９８７４Ｘ

【作者名】
竹

【あらすじ】
寄るな触るな見るな、どこへなりとも行きやれ！！どうして我ばかり不幸になる？ぬしらは良い笑顔で共に幸せになろうなどと抜かすな莫迦が。ヒッ！？ま、待ちやれどこを触って…！
大谷さん中心にちょこちょこ書く予定。
愛し愛され恋い恋われ…とにかく大谷さんです。
どんなキャラ崩壊でもばっち来いな御方はご賞味あれ。追記：リクエスト受け付けてます。

**パーマグラネットに囁いて。**

大谷さんとみんなでキスネタ

髪

豊臣秀吉×大谷吉継

「髪にも香を染み込ませたのか？」（貴様の香りが離れない）

髪　（思慕）

額

竹中半兵衛×大谷吉継

「少しは休んで。ね？」（君も幸せになれるんだよ）

額　（祝福）

瞼

真田幸村×大谷吉継

「大谷殿は石田殿のことをよく見て居られるでござる。」（某のことは見ないのに）

瞼　（憧憬）

耳
松永久秀×大谷吉継
「卿は、自分の幸せを願うことはないのかね？」（私が叶えてあげようか）
耳　（誘惑）

鼻梁
お市×大谷吉継
「蝶々さん、かわいい…」（市の、もの…ふふ）
鼻梁　（愛玩）

頬
前田利家×大谷吉継
「こんなところにまつの飯が！」（貴殿と食べる飯はうまい）
頬　（親愛）

頬2
まつ×大谷吉継
「あれ、ご飯粒が。」（貴方様の笑顔でまつもお腹いっぱいになる

のでございます）

頬２（満足感）

唇

（鏡の中の）大谷吉継×大谷吉継

「ヒ、ヒ…ぬしなぞ、誰も愛さぬ。」（泣くなナクナ、我が慰めてやろ）

唇（愛情）

喉

織田信長×大谷吉継

「我以外と交わす言葉が必要か？」（いっそこのまま食い千切ってしまいたい）

喉（欲求）

首筋

伊達政宗×大谷吉継

「蝶と竜か、悪くねぇ。」（今からお前は俺のもんだ、ｙｏｕ　ｓｅｅ？）

首筋（執着）

背中
片倉小十郎×大谷吉継
「次逢ったら…いや、良い。」（今はこれが夢でないと思いたい）
背中（確認）

胸
石田三成×大谷吉継
「刑部、どこにも行くな。」（離れるな、ずっとだ。この先未来永劫、私は貴様と共に在る）
胸（所有）

腕
前田慶次×大谷吉継
「アンタが恋してる話は、あんまり聞きたくねぇんだ。」（しがみついて格好悪くても、アンタが好きだと言いたかった）
腕（恋慕）

手首
長曾我部元親×大谷吉継

「海賊ってなぁ欲しいもんは力尽くで手に入れるってもんよ」（アンタの過去も未来も俺が奪う）

手首（欲望）

手の甲
風魔小太郎×大谷吉継

「…」（お疲れ様です）

手の甲（敬愛）

掌
徳川家康×大谷吉継

「刑部も天下も三成も、なんて…ワシは虫が良すぎるな。」（今だけその手の中で泣かせて）

掌（懇願）

指先
雑賀孫市×大谷吉継

「手まで動かなくなった訳ではあるまい？」（この手が守り抜いてきたものは一体いくつあるのか）

指先（賞賛）

腹

本多忠勝×大谷吉継

「ギュイーン。」（もう痛くはないのだろうか…。くすぐったそうに頭を撫でられた）

腹（回帰）

腰

黒田官兵衛×大谷吉継

「どうだ刑部！これで逃げられねぇだろう？」（枷の代わりに小生が捕まえててやる）

腰（束縛）

腿

毛利元就×大谷吉継

「貴様は我の蝶よ。」（このまま篭に閉じ込められたなら…）

腿（支配）

脛

猿飛佐助×大谷吉継

「仰せのままに、ってね。」（アンタのために、動いてあげる）

脛（服従）

足の甲

小早川秀秋×大谷吉継

「僕は、貴方の道具だよ。」（愛じゃないことくらい、分かっているつもり）

足の甲（奴隷）

爪先

天海×大谷吉継

「ふふ…貴方のことは、全て分かっていますよ。」（私の全て、あぁ刈り取ってしまうのが惜しい）

爪先（崇拝）

**置き去りピップ。**

大谷さんとみんなでキスネタ（入らなかった人たち版）

額

武田信玄×大谷吉継

「むぅん、ちと軽すぎではないのか？」（幸にも不幸にも押し潰されぬようにワシが抱えよう）

額　（祝福）

瞼

北条氏政×大谷吉継

「ひょっひょ！睫毛がついていたのじゃ」（今ばかりは風魔も呼べぬのぅ）

瞼　（憧憬）

耳

明智光秀×大谷吉継

「私と共に来ませんか？」（地獄の果てまでご案内しますよ）

耳　（誘惑）

鼻梁
島津義弘×大谷吉継
「おまはんは、むぞらしかね」（そしてぐらしい）

鼻梁　（愛玩）

頬
鶴姫×大谷吉継
「ほらほら、もっとニコッてして下さい☆」（表情一つでも未来は変わるんです）

頬　（親愛）

頬2
いつき×大谷吉継
「おめさに、頼っても良いんだべか？」（その腕の中は安心できるだ）

頬2　（満足感）

喉
宮本武蔵×大谷吉継

「なぁ、おれさまと勝負しろよ。」（勝ったらそん時は…）

喉　（欲求）

首筋

今川義元×大谷吉継

「不思議でおじゃる…」（麿の素顔を晒しても、良いと思った）

首筋　（執着）

背中

最上義光×大谷吉継

「我輩は、貴殿の名を呼ぶよ。」（吉継、吉継…間違えようもないね）

背中　（確認）

胸

上杉謙信×大谷吉継

「うつくしきちょう…」（たいへいのよがおとずれたら、かくごなさい）

胸　（所有）

手首
大友宗麟×大谷吉継
「貴方も愛を知るべきです。」（僕の愛を受け入れて）

手首　（欲望）

手の甲
浅井長政×大谷吉継
「市が世話になっているようだ。」（この者に幸多からんことを）

手の甲　（敬愛）

掌
ねね×大谷吉継
「秀吉さまを、お願いね。」（寂しがりやで意地っ張りなのは貴方と一緒）

掌　（懇願）

指先
かすが×大谷吉継

「謙信さまがお前のことを言って居られた。」（誰よりも幸せになるべき者と）

指先　（賞賛）

**置き去りピップ。（後書き）**

地方武将…すまん、キャラが分からない。

最後担当のかすがちゃんでしたが、
あれは私の願いでもあります。

みんなでもみくちゃに愛してあげて下さい。

※島津どんの方言について

むぞらしかね→可愛い
ぐらしい→可哀想だ

間違っていたらご一報下さい。

**パンプキンの憂鬱。**

大谷さんとお菓子と悪戯

伊達政宗の場合

「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ？」（菓子が無いならアンタを食らう）

真田幸村の場合

「と、とりっく…お、あ…鳥？」（よくは分からぬが、団子を貰えたでござる）

徳川家康の場合

「トリック・アンド・トリート」（ワシはお菓子と刑部が欲しい）

石田三成の場合

「刑部」（菓子はいらん貴様を寄こせ）

長曾我部元親の場合

「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔッ？」（あてっ、ちょ、豆は投げんじゃねぇっ！）

毛利元就の場合

「…Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ」（餅か。悪くないな）

前田慶次の場合

「えーっと、Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ？」（え、もう食っちまった？…そ、れは食べても良いってことには…）

黒田官兵衛の場合

「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｋｅｙだ！どうだ刑部、小生は賢いだろう！？」（鍵がなきゃお前さんごと食っちまうぞ）

## パンプキンの憂鬱。（後書き）

みっちゃん、せめてＴｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔは言おう…！！

**やきもちストロベリー。**

三吉

「いっそのこと窒息しろォオオオ！！」

耳をつんざくような怒声が聞こえ、我はまたか、と肩を竦めた。

家康との対立から、三成はやけに怒りっぽくなったと思う。

無論、前々から神経質なところがあったのは分かっているが、

それにしたって怒るおこる…。

『いつの間に莫迦を通り越した？』

『刀狩りだ。利き腕と共に刃を差し出せ。』

『いいだろう…気の済むまで斬滅してやる！』

探せばいくらでも出て来る。

「はぁ。」

小さく吐いた溜息は三成の「家康ゥ！！」にかき消されていく。

「三成、三成。」

くんっ、と三成の袖を引っ張って我に気付かせた。

「いえやｓ…どうした刑部。」

袖にやったのとは別の手を三成の頬に置き、

「…我を窒息させてみせ。」

そう言った。

しばらく石のように固まっていた三成が口を開いたのは、

黒々とした影二つが離れてからだった。

（…家康に妬いたのか？）

（ヒヒ…さぁて、我にはとんと分からぬな。）

**タンジェリンは喋らない。**

官吉

『君たちは本当に仲が良いね。』

銀髪をなびかせた男がそう言ったのは、いつのことだったか。

少なくとも、小生に枷が付く前だ。

『ケッ！刑部と仲良しこよしに見えるか？』

投げつけられた泥団子を払い落としながらそう答えた。

仲が良いなんて、どう見たって考えられないだろうに。

元服も済ませた野郎同士に、ケンカするほど、

なんて言葉は似つかわしくない。

刑部はただ小生を苛めて楽しんでやがるんだ。

『嫌いじゃないくせに』

その言葉には、なんと答えたのか。
もう思い出せなくなっていた。

「暗、憂い事か？」

鉄球に腰掛けていた小生を数珠ですっ転ばせた刑部は、ケタケタと笑っていた。

「あぁそうだよ。なんでお前さんはそんなに素直じゃないのかと思ってね！」

あの時のように土に塗れて、器官に入った砂を咳と共に吐き出した。

「素直も何も、ぬしが嫌いだからよ。」

「小生だってお前さんなんか嫌いだね。」

「トウゼンであろ、病患いを好くとすれば、ぬしはそういう性癖なのかと疑いたくなるわ。」

「そういう考え方が嫌いだって言っているんだ。」

「どちらにせよ嫌いなのであろ？」

「あー嫌いだね！」

『嫌いだったら、わざわざ構ったりしないだろう？愛情の裏返しは無関心だよ。』

『好いているから、お互いに嫌いだなんて言い合えるんだ。』

『少し、羨ましいよ。』

半兵衛の言う事は、知性派の小生にも理解し難かった。

けれど、

「嫌いよ。」

「嫌いだ。」

そう言い合えなくなると思と、チクリと胸が痛んだ。

**泣き虫マンゴー。**

官吉

「ヒヒ、ヒッ…！！」

愉快で仕方が無いと言うように、刑部は笑う。

だが、こんな笑い方をしてる時、あいつは不機嫌だ。

障子一枚で仕切られた部屋の外と中。

城の離れ、仕事以外で訪れる者の少ない部屋。

そこで刑部は笑う。

（寂しいのか）

よく、そう思う。

刑部があぁやって一人閉じ籠って笑う時、三成は必ずと言って良い程、居ない。

わざわざ居ない時を狙って笑うものだから、てっきり居なくなって嬉しいのかと思いきや、

実は逆だ。

（寂しくて）

寂しくて寂しくて、そんな自分が滑稽で、笑うんだろう。

「ふ、ふ……っ、ひ…」

そうしてもっと寂しくなって、

「…暗、いつまでそこに居るつもりか。」

小生に当たり散らすんだろう？

カタ、リ

やや滑りの悪い障子を開いて、枷のはまった腕の中に刑部を閉じ込める。

「お前さん、泣き方を間違えてるよ。」

引きつり笑いが固まって、また、始まった。

けれど、刑部は小生の腕から逃げ出さない。

「ヒ、ヒ…！暗ぁ、我が泣いていると？どう見ても笑っておろ。」

確かに一滴の雫すら流れた様子はないし、目だって赤くもなんともない。

でもそれは、刑部が上手く泣けないから。

いや、ずっと泣き続けて涙が枯れたのか？

刑部を抱き締める腕に、少しだけ力を込めた。

このままもっと力を込めれば、こいつの細っこい体なんてポキリといっちまう。

ケタケタと笑っていた刑部の瞼に、

ちぅ

と、小さな音をたてて唇を落とした。

「……なんだ、お前さん、ちゃんと泣けるじゃないか。」

透明な雫を降らすこいつは、きっと誰よりも人なんだろう。

泣けるように、小生が居てやるから。だから、

（だから）

「ほら、笑え。」

**バナーナの勘違い。**

毛谷

ほんの興味だった。

サンデーの名残りのせいだと、言い切ってしまいたかった。

けれど、できない。

事の発端は、大谷との茶会。（という名の悪巧み）

「大谷、一つつまらぬ事を聞くぞ。」

「あい？」

「そう、愛についてよ。」

あの時の大谷のポカンとした表情すら、鮮明に記憶に残っている。

「貴様は誰ぞ懸想をする相手は居るか？」

「同胞、急になんの「答えよ」

…居る訳無かろ。」

「そうか。」

訝しげに首を傾げる大谷に、更に問うた。

「大谷、愛とはなんだ？」

「ぬし、誰ぞ良い人でもで「なんだ？」

…そ奴を大切にしたい、とかそういう気持ちであろ。」

また台詞に被せて来おって、と毒づく大谷だったが、我は気にしていなかった。

「大切にしたいと思う事が愛か？」

「知らぬわ。愛は人それぞれの型があるらしい。」

「…では、相手を喰らいたいと思うのは、愛か？」

「同胞よ、色恋の話なら前田の風来坊にでもしやれ。我が分かるはず無かろ？」

盛大に溜息をつく大谷の肩を掴んで、床に叩きつけるように覆いかぶさった。

「も、うり…？」

「これも愛の型だろう？」

白頭巾がズレて口元が露わになる。
水分が足りていないのか乾いて見えるそれに口を寄せ、チラと相手の顔を見た。

（さすがに泣きはしな――――っ！？）

まさかの赤面だった。

これから来るであろう感触に備えて、眉間にシワがよる程きゅうっと目を瞑り、
手も硬く握られて居る。

「…？」

いつまでも反応のない我に、大谷はようやく目を開けた。

「悪ふざけが過ぎるわ。」

ふい、と逸らされた顔。

まじまじと見つめていれば、居心地が悪そうにもっと逸らす。

思わず、その姿が（愛い）などと思った我に頭突きを食らわせてやりたい。

ふ、と小さく笑んで、我は大谷を解放しようとした…が、体は正直だ。ピクリとも動かない上にこんなことをのたまった。

「悪ふざけ、そう思うか？」

ぴく、と小さく揺れる肩。行き場を失った様に左右に振れる瞳。何か言いたげに開く唇…

「や、やめよ。同胞、」

ぐい、と顔を近付けて、片手を下へ。

「何をだ。」

疑問符を置いてけぼりにして、腿の辺りをサラ、と撫でる。

「っ、ふ…われに、触れること、を…！」

「我慢ならないか？」

下腹部の中心をトン、と突けば「ひっ」などと小さく啼く蝶。

その首筋に舌を這わせたところで、邪魔が入った。（いや、助けか？）

「毛利さま」

刻を告げに来た捨て駒により、我は正気を取り戻す。

「…しばし待て。」

大谷から退き、手を引いて起こしてやる。

お互いに無言で、どう声をかけたものか分からず、情けなくも我は突っ立ったままだった。

（謝罪の言葉を――）

謝らなければ、今後関係が悪くなりかねないというのも承知していた。

しかし、謝りたくなかった。

結局、何も言い出せぬまま船に乗り、安芸へ帰った。

（ときとき）

（可笑しい）

（とくんとくん）

（医者を呼ばねば）

（きゅうっ）

「えぇいなんだと言うのだッ！！」

心の臓が、音が、鳴り止まない。

「くそっ」

（こんなもの）

（計算し切れぬ…ッ！！）

（傍に）（もう一度触れたい）（笑って）（我だけに）（我の）（
あの時の感覚が）（心の臓がもたない）（たすけ）（て）

言い訳を考えては打ち消して、くらくらと逆上せた頭の中。

なぜ問うた？

（懸想をする相手は居るか？）

居ないと聞き、安堵した。

（愛とはなんだ？）

貴様が望む愛が知りたかった。

（悪ふざけ、そう思うか？）

思いを、伝えたかった…！

（莫迦か）（触れてから、気付くとは…）

きゅうきゅうと締め付けられるような胸の痛みが、より一層増した気がして、我は無意識に大谷の名を呼んだ。

## バナーナの勘違い。（後書き）

この二人は百合っぽいなと思ったりします。

**すれ違いメロン。**

官吉、家三前提の官三と家吉

※誰も報われない。枷なしかんべ。豊臣時代。大谷さんはまだ歩ける。

以上が許せるお方はどうぞ、お口汚しを…

誰もいないと思って居るのだろうか。

薄暗い廊下を手を繋いで歩く家康と三成は、傍目からは幸せに見える。

ただし、傍目からなのだ。

「ヒ、ヒ…あ奴らは仲が良いなぁ。」

小生の隣の恋人は、対抗でもする気か手をそっと触れさせた。

その手を握って、

「あぁ、そうだな。」

と、適当に返して、小生は見慣れた銀髪を目で追った。

「お前さんも人が悪いな。」

「貴様に言えたことか？」

何も身に付けず、肌を合わせる。

銀髪を撫でれば、気持ち良さそうに目を細める、こいつは、

「どういう意味だ？三成。」

家康の恋人だ。

けれど、今の小生たちも傍目からは恋人同士に見えるだろう。

「刑部に目をやらなかった貴様に、言われたくは無いな。」

「そうだったか？」

「ふん、最低だな。」

「どっちが。」

次の言葉を待たずに口を塞いでやれば、くぐもった声が耳についた。

「…は、…ぁ、かんべ、ぇ…もう一回だ。」

「綺麗な顔して、ほんっと淫乱だな。」

「家康の前じゃこうにもいかないからな。」

「同衾もまだか。」

「何も知らぬフリというのも疲れる。」

どちらからともなく口付けて、夜を過ごした。

「暗、昨夜は…どこに居た。」

ギクリとした感覚なんて、とうの昔に忘れた。

「あぁ、悪いな。終わらせたい仕事があったから篭ってたんだ。」

知性派と言うだけあって、仕事と言えば疑われないことを、小生は知っている。

「そうむくれると、可愛い顔が台無しになっちまうぞ？」

わしゃわしゃと髪を撫でれば、まだ文句を言いながらもその口調は和らぐ。

あぁ、よかった。今回もやり過ごせた。

内心で安堵しつつ、本当に仕事があったことを思い出して手を離した。

その時、刑部が小さく「さよなら、よ」と言ってたなんて、知らなかった。

「三成。」

うざったいほど明るい笑顔で、私の名を呼ぶ。

「ほら、ここ寝癖が付いてるぞ。」

「直す時間が無かった。」

官兵衛と居たから、なんてもちろん言えないが。

「そ、その…そういう三成も良いな！あ、いや、可愛いと言うか新鮮と言うか…」

「抜かせ。」

「本当だ！三成は可愛い！！」

言い切る家康は、私と官兵衛の関係を知ってもそう言えるのだろうか。

照れたフリをして、後ろを向き歩き出した。

だから、見えなかった。

家康の笑顔が苦しげに歪められていたなんて。

「刑部。」

「三成か。」

廊下ですれ違った刑部は、いつも通り私に笑いかけた。

「部屋へ戻るのか？」

「あぁ。」

貴様の官兵衛が待っているからな。

これも言えないが。

「刑部はどこへ行く？」

「我はちと太閤の元へな。」

「相変わらず、秀吉さまはお前をしっかり評価して下さっているのだな。」

「なに、それはぬしらも同じであろ？」

家康と私が一緒だと？

それは違うと言いたかったが、黙っておいた。

「ではな。」

「あぁ。」

刑部が私の横を抜けた。

貴様なら、すぐに気付くと思っていたのだが、見込み違いか。

嘘だった。何もかも。

太閤の元へなど行かぬ。

あれは、ただのその場しのぎ、三成から離れたかった。

友だと思っていた、恋人だと思っていた。

けれど、それもマコトではなかった。

離れたくて、一人になりたくて、会いたくて、廊下を駆け抜ける。

「…！！」

「おっと」

角でぶつかってしまったのは、家康だった。

「刑部がそんなに慌てているなんて珍しいなぁ！」

ぽん、と肩に置かれた手。

この手だって、三成に触れたいに違いないのに。

「家康…」

「うん？」

「なぜ、こうなってしまうのだろう。」

ポタリ、ポッ、ポッ

声は出なかった。

ただ目から溢れる水を止められないままでいた。

「大切だからこそ、気づいてしまうんだな。」

「あぁ。」

「だが、それでもワシは繋がりが欲しかった。」

「…」

「だから、ワシは…」

「…ん。」

「気づかないフリをするんだ。」

我は、ぬしをただの阿呆と思っていた。

違う。

ぬしは、誰よりも聡く、悲しき男だ。

自分を見ているような気になって、家康を抱き締めた。

それに合わせて、我を抱き返す家康も、泣いていた。

（我はただ）（こうやって抱き締めて欲しかった）

その日の夜に、秘め事が増えた。

互いに目隠しをして、

「家康」

「刑部」

名を呼んで、傷を舐め合う。

愛しい人の名を伏せて、愛しい人への愛の捨場に、互いを選んだ。

満たされない、カラカラの何かがヒビ割れて壊れる音がした。

**すれ違いメロン。（後書き）**

あるぇ、大谷さんが幸せじゃない…マイガッ！！

**チェリーは小さく爪を噛む。**

すれ違いメロン。の続き

秘め事は、それからずうと続いていた。

官兵衛と三成が共に居る時に、我は家康に縋り、家康も我を求める。

滑稽よな。

家康が触れたいのは、三成だと言うのに…それが触れるのは、

醜い我なのだから。

笑いもできぬ。

『刑部、っ…平気か？』

我を抱く時、必ず家康は心配をした。

無理をさせていないか

痛くはないか

何度も問う。

（けどそれも全て）

三成に宛てたものなのであろ？

だから、我は、もう終わらせてしまいたかった。

（暗）（暗）（く、ら）

ここ最近、やけに家康の機嫌が良い気がする。

だが、私は何かした覚えは何も無い。

なのにどうしてあんなに笑っているんだ？

ぼうっとしたまま歩いていたところ、見慣れた白頭巾が廊下に現れた。

「刑部か。」

「三成か、朝餉は取ったか？」

「いらん。」

いつも通りの会話をして、そのまま横を抜けようとした。

「三成。」

ぴたり

その声に合わせて足を止める。

やはり、貴様は気付いて居たのだな。

「三成…」

「なんだ。」

刑部の声は震えていた。

「三成。」

「だからなんだ？」

「…頼む。」

振り返らない。

けれど、刑部は泣いているのだろう。

刑部がそこまで執着するのは、私ともう一つしかない。

「……あ奴を、返してくれやれ……」

やはり、官兵衛か。

「刑部、一つ勘違いをしていないか？」

「…？」

「返せも何も、あいつは自分で私を選んだ。もう貴様のものではない。

違うか？」

私は官兵衛に好意など抱いていなかった。

それは向こうも同じで、だから共に居たのだ。

「貴様なら分かるだろう？」

振り返れば、刑部は背を向けて俯いていた。

ここまでしておいて、心が痛まぬと言うのも可笑しな話だ。
むしろ、勝ち誇ったような気分さえする。

「そうよな。」

声を絞り出して、刑部は言った。

「…あ奴は、ぬしを選んだ。…すまぬ。」

その言葉を聞いて、私は歩き出す。
今、刑部が一番会いたい奴に会うために。

「聞け、官兵衛。」

「なんだ？」

「刑部に会った。」

わざわざ三成が報告するくらいだから、何かあったんだろう。

「どうかしたのか？」

「世間話だ。」

「刑部が？」

まぁ、三成相手ならあり得ん話でもないが…

「その後、言われた。返して、と。」

楽しげに笑う三成と、言われた事に対して何の感情も湧き上がらない小生。

「そうか。」

「それだけか？」

冷めた奴だ、と呟きまた笑う三成の頭を撫で、抱き寄せる。

「良いのか、帰らなくて。」

「今帰っても数珠が飛んでくるだろ？」

「それもそうだ。」

抱きしめたのも、接吻をしたのも、抱いたのも、笑顔を見たのも、
好きと言ったのも、名を呼ぶ事さえ…

もう思い出せないほど遠い記憶になっていた。

忘れたのは、小生に愛がなかったからか？

それとも、

脳裏を過った考えは、快楽に飲み込まれて行った。

「帰ったか。」

部屋の前には、刑部がいた。

「おぅ、ただいま。」

ひら、と手を上げて中へ入る。

動こうとしない刑部を招き入れて、座らせる。

「なんか用か？」

「用が無くては来てはならぬのか？」

恋仲なのに、と薄ら笑いを浮かべる刑部は、儚げかつ、妖艶さを醸し出していた。

「まぁ、用もあるが。」

「仕事なら断るぞ、お前さんの寄こすのは酷いのばっかりだ。」

「ヒ、ヒ…！ワザとに決まっておろ。」

いつもいつも遠くにばかり行かせやがって、と刑部を軽く睨みつければ、
肩を竦めてはぁ、と息を吐いた。

「……どんなに遠くにやっても、ぬしは帰って来て我に文句を言いやる。」

「当たり前だ。」

「…そういうところを、好いておった。ずうと前からな。」

すす、とこちらにやって来て小生に寄りかかり刑部。

（こんなに細かったか？）

触れたら、壊れてしまう気さえ、した。

「暗、我は、誰かを慕うという気持ちがよう分からぬ。」

「あぁ。」

「だから、どうすればぬしが喜ぶのかも、我の元に帰って来るのかも、分からぬ。」

「…おい、何言って」

「そうであろ、ぬしは、我から離れるばかりよ…好いても、好いても、

…我を見てはくれなんだ。」

俯いて表情の見えない刑部に触れようとした。

けれどそれは、最後に残っていた良心が咎めた。

（汚い手で触るな、ってか。）

自分の心と体の動きが噛み合わない。

「すまぬ、…こんなことを言うつもりは無かった。最後に、一つ頼まれてくれぬか？」

やはり、反応するより前に体が動いて、小生は頷いていた。

「ぎゅ、って、しやれ…」

気恥ずかしそうに笑う刑部に、どうしてか涙が零れた。

「借りるだけ、よ…今だけ。」

貸すとか借りるとか返すとか、そんな言葉が聞きたかった訳じゃないのに。

小生は無言で刑部を抱きしめた。

「…あたたかい、なぁ…くら。」

「あぁ」

「久しぶりよな。」

「あぁ」

気の利いた台詞の一つや二つ、かけられないもんかね。

小生は、こんな時ばかり臆病だ。

「…好きよ。」

「…」

「…すまぬ。」

好きと返せない、謝るべきなのに、言葉が出て来ない小生。

「暗。」

「…吉つ、ぐ…」

「ぬしは、優しいなぁ…」

あぁ、そうか。

小生が三成を見ていた時、お前さんも小生を見ていてくれたのか。

遠くにばかりやったのは、三成から離したかったから、

そんで、文句を言いに小生が自分のところに来るようにしていたんだな。

今更気付いたって、もう遅いんだろう。

刑部の涙すら、拭えない。

## チェリーは小さく爪を噛む。（後書き）

本当はこの後に三成と家康のターンが待っていましたが、あまりにも報われなくて私の心が折れました。
…希望されたら、書こうと思います。
やっぱり報われませんが、それで良いなら…

**みたらしピーチ。**

吉幸吉

※童話っぽい。幸村が姫。

姫は、憂鬱でした。

なぜならば、この世界では姫だから。

戦には当然出してもらえず、ただ結婚して子を成すためだけに生まれたようなものでした。

だから、目の前に悪い魔女が現れた時、姫は抵抗せずに捕まったのです。

「外の世界は、こうなっているのでござるか！」

「街一つで騒がしい姫さまよな。」

「連れ出したのは貴殿でしょう。」

「攫ってくれと言ったのはどこの誰だったか。」

魔女は、足が悪いらしく、ふわふわの空飛ぶ絨毯に乗っていました。

心のきれいな者でなければ乗せられないなんて嘘を言って、姫を乗せようとしませんでした。

けれど、姫とて頭を使います。

「こうすれば乗れるではありませぬか！」

魔女の膝に乗って誇らしげにそう言うと、驚いた魔女は仕方なく姫を膝に乗せたまま、空を飛びました。

「きれい…」

ついに国から脱出してしまった姫は、夕焼けに照らされる国を見て、そう呟きました。

さぁ、姫を自分の城へ連れ帰った魔女は準備に取り掛かります。

この姫をダシに、やって来た者たちを逆に捕まえ、身の回りのことをさせようと思ったのです。

有能なものが手に入れば、姫を国へ返すはずでした。

けれど、姫が魔女の世話をしてしまうので、それは叶わなくなってしまいました。

「姫、本が読みたい。」

そう言えば姫はたくさんの書物を抱えて来てくれるのです。

「姫、少し寒い。」

そう言えば、姫は暖炉に火を入れてくれるのです。

「姫、腹が減った。」

こればっかりは姫にはできず、魔女がすることになりましたが。

それでも魔女は、姫との生活を好きになりかけていました。

だから、姫がこの城から出ていかないように様々な持てなしをしました。

姫が飽きないようにドラゴンを遊び相手にし、戦わせてあげました。

それなのに、

「魔女殿、某はそろそろ誰かと手合わせがしとうございます。」

姫がそんなことを言うものだから、魔女は困ってしまいます。

仕方なく、姫の情報を掴んでやって来た暗という奴と戦わせてみました。

驚くことに姫が勝ってしまったのです。

「姫、楽しいか？」

「はい！」

嬉しそうに笑う姫を見ると、魔女は心臓の辺りが痛くなるような気がしました。

暗には国へ帰ってもらいました。

そのため、姫を取り返しにやって来た者が姫の返り討ちに遭うという事件は、

国中に知られてしまったのです。

「あのｐｒｉｎｃｅｓｓはどうやら魔女に操られてるんだな？」

さすらいの旅人は、そう勘違いをして魔女の城へと向かいました。
やはり同じように姫が相手をしましたが、この旅人、かなりの腕前です。
お互いに一歩も引かぬ戦いが三日三晩続き、ついには姫が負けてしまいました。

「姫！！」

魔女が姫に駆け寄ります。
姫はもう、虫の息でした。
魔女は最後の力を振り絞って、姫に魔法を掛けました。
姫を救うことと引き換えに、姫を運命の人のキスでしか目が覚めないようにしたのです。
目が覚めた時、姫の時間は動きだし、目の前には運命の人が居る、そうなれば良いと、もう魔法を使えなくなった魔女は思いました。
最初のキスは、あのさすらいの旅人でした。
二人のキスを見ていると、とてもお似合いで、魔女はもっと心臓が

痛くなりました。

けれど、姫は起きません。

旅人は帰って行きました。

それから何十年が過ぎても、姫の運命の人は現れませんでした。

魔女は焦っていました。

自分の寿命が近いことを悟っていたからです。

皺くちゃの手で姫の柔らかい頬を撫で、魔女は泣きました。

あの時、自分が城から連れ去らなければ、と、後悔しました。

魔女は最後の日、姫の眠るベッドに腰を掛け、その手を取りました。

「姫。」

もう一度だけでも目を開けてくれたなら…

魔女は悲しげに笑いながら、姫の手の甲に唇を落としました。

ぴく

と、微かに姫が身じろぎしたような気がしました。
ぼやける視界の中で、姫の笑顔だけが輝いているようでした。
「…最期に、良い夢を見た。」

「某を置いて、勝手に死なないで下され、魔女殿。」
姫はそう言いながら、目を閉じる魔女に口付けました。
するとどうでしょう。
魔女は死の国から連れ戻され、みるみるうちに若返っていくではありませんか！
「これは…」
驚きのあまり声のでない魔女に、姫が言いました。
「魔女殿が某に掛けた魔法のお陰で、某も少しだけ魔法を使えるよ

うになったのでござる。」

「…我は、ぬしは運命の人のキスでしか目が覚めないようにしたのに…これは一体。」

「まだお分かり頂けないのでござるか？…某の運命の人は、貴殿でござる。」

耳を疑う魔女でしたが、その手は姫と繋がったままでした。

「某と共に、生きては下さらぬか？」

魔女は胸がいっぱいになり、ただ頷きました。

「…喜んで、お受け致すわ…姫さま。」

それから二人は末永く幸せに暮らしましたとさ。

## みたらしピーチ。（後書き）

ご都合主義バンザイ！！

幸せにしたかったんだが、方向性を間違えたような気もする。

## グレイプの夢日記。

官吉

※現代転生とバサラ時代が入り交じり。現代にょ谷さん。

こんな夢を見た。

「お前さん、誰だ？」

小生が入ると、少し窮屈な部屋に、一人の少女が居た。

「さぁ、誰だって良かろ。」

ふむ、それもそうか、と頷いて、はて、と首を傾げた。

「ところで、お前さん、ここはどこかね？」

痩せこけて、頬の辺りがやや窪んだ少女は、こう答えた。

「病院よ。」

病院、なんだそれは、とやはり首を傾げるが、鼻を突くツンとした匂いに、

きっと薬師がいるところだろうと思った。

「お前さんは、どこか悪いのかね？」

どうしてだか足のある寝床の上にいる少女は、こう答えた。

「足と、肌が弱いのよ。」

なるほど、だからそこから動けないのか。

布団に隠れてしまってはいるが、きっと足は包帯で巻かれているんだろう。

「お前さん、ずっと一人か？」

薄い桃色をした部屋で、ずっと。

首の辺りに管を通した少女は、こう答えた。

「……そうよ。」

そうか、一人か。

「なら、これから小生が見舞いに来てやろうか？」

夢だろうが、なんだろうが、これも何かの縁だろう。

ぽた、ぽた

「……もっと早うに、来やれ……ばか。」

その涙を拭おうと手を伸ばした時、少女の目が見えた。

それは、自分が最も憎み、嫌ったあの……

「…ら、…く…」

「ほぇ？」

「…ば官兵衛さまは今頃お目覚めのようで。」

嫌みったらしく小生の頬やら前髪やらをぐいぐい引っ張るのは、刑部。

「…もう、泣いてないんだな。」

ふと口を突いて出た言葉に、刑部は首を傾げる。

「いや、なんでもない。夢を見てたんだよ。」

少女は、もう余命が一年も無かった。

幼い頃から病弱で、たまの旅行に行けば事故で両親を失った。

友は、時々やってくる喘息持ちの三成と言う男だけだった。

少女は、前世の記憶を、断片的にだが、覚えていた。

（暗、暗…）

昔の自分は、きっとその（暗）が嫌いだったのだろう、とずっと思っていた。

薄桃色の部屋に移され、とうとう死を覚悟しなければいけなくなった。

何一つ良い事がないまま、たった一人で。

そんな時、

こんな夢を見た。

ノックもなしに病室へ入ってきた男は、

「お前さん、誰だ？」

声、その形、手にはめた枷。

男は、自分の覚えている中の、暗、だった。

他愛もない疑問と返答のやりとりが繰り返されていく。

（暗、暗）

一つ質問が重なるごとに、自分は記憶を取り戻すのに、相手は、我が誰かと言う事すら、気付いていなかった。

「お前さん、ずっと一人か？」

一人になったのは、ぬしが居ないせいよ。

そう、言ってしまいたかった。

「なら、これから小生が見舞いに来てやろうか？」

現世では、顔も見せぬくせに。

そんなに優しい言葉を掛けるな、やめやれ…

もっと我に時間があったなら、もっと我が健康であったなら、

「……もっと早うに、来やれ……ばか。」

目が覚めた時、眼瞼は腫れぼったくなっていて、ツン、と鼻の奥が

痛んだ。

「痛てててッ！！ちょ、おい、もっと優しくできんのかね！？」

廊下の奥で、ぎゃあぎゃあと騒ぐ声と、それを咎めるような看護師の声が聞こえた。

「もうっ、そんなに元気なら入院なんて要らないんじゃないですか？黒田さん。」

「痛い痛い！折れた骨がぁ！！」

現れたのは、両手を折って、まるで枷のように包帯を巻かれた、暗だった。

（どちらにせよ、遅すぎるわ、暗め。）

## グレイプの夢日記。（後書き）

この後、両手の使えない暗へあーんとか、キノちゃんの闘病生活とか、色々ドラマがあるはずです。

誰か代わりに書いてくれんかね…？

**おこたの中のペア。**

吉鶴

※会話文です。

「大谷さん！今年も！大量の！みかんをっ！」

「落ち着け巫女殿…」

「これが落ち着いていられますか！寒いです、寄ってください。」

「わざわざここに入る必要はあったか？」

「大有りです。寒いのは手足だけじゃないんですからね？」

「我のコタツが…ぐふぇ、巫女殿、腹を押すな腹を。」

「もうっ、どうしてこう言う時黙ってぎゅっとしてくれないんですか！」

「今ぎゅっとしたら我は何か出そうな気がしやる。」

「きゃああ！あっち行って下さい！！」

「押すなと言うたであろ。」

「いたっ！だからってどうして叩くんですか！？」

「悪いことをした子を撫でろと言うのか。」

「えぇ、そうです！さぁ！」

「…はぁ。」

「髪をぐしゃぐしゃにしないで下さいっ！」

「撫でて欲しかったのであろ？」

「もっとこう、優しくです！」

「我には難しい相談よなぁ。」

「えっ？あれだけ眠っている私を撫で回すくせに何を言ってるんです？」

「……なぜ起きていると言わなんだ。」

「そうしたら撫でてくれないに決まってるからです★」

「というか、撫で回す程でも無いと思うが。」

「…知っていますよ大谷さん、私の腹を撫でつつ『発展途上よな。』と呟いたことを！」

「はて、なんのことかさっぱり。」

「胸と腹の違いが出てないってことですか！そりゃ孫市姉さまのよ

うにはなってませんけど！」

「み、巫女殿、落ち着け。」

「大谷さんが大きくしてくれないからってことですよね？」

「なぜそこで我の名が出やる。」

「だって胸って揉めｂ「やめよ巫女殿。」

「えへへ、あったかいです。」

「全く…甘えたいなら最初から言いやれ。」

「最初から言ってたのに甘えさせるのを恥ずかしがってたのはどっちですか？」

「…困った巫女殿だ。」

「困った大谷さんです。」

## おこたの中のペア。（後書き）

大谷さんと鶴ちゃん。

結構好きです。

ほわほわした空気を出してくれれば良いなぁ…

**ラ・フランスの動物愛護。**

官と吉

※大谷さんが猫、かんべが犬。

「ご主人、飯はまだかね。」

「我がひっくり返してやったわ。」

「なんてこった。」

「ご主人、構ってくれんかね。」

「主様は今忙しい。」

「そいつは残念。」

「代わりに我が可愛がってやろ。」

「お前さん、爪を構えて何をする気か。」

「ご主人、散歩に行こう。」

「主様は今居らぬ。」

「くぅ……。」

「我と行くか。」

「ご主人とが良いんだ。」

「ご主人、遊んでくれんかね。」

「主様は今パソコンに夢中よ。」

「あの絡繰を壊してしまおうか。」

「主様に嫌われるぞ。」

「ご主人、遊んでくれ。」

「聞き分けのない犬め。」

「この尻尾で誘惑してやろう。」

「主様はパソコンの中のオジさんに誘惑されておるが。」

「なぜじゃー。」

「…。」

「なぜじゃー。」

「何を騒いでおる。」

「遠吠えだよ。仲間が気付いてくれるんだ。」

「気付くとどうなる。」

「来てくれる。」

「嘘を吐け。」

「元々、主様は猫派で、我のご主人よ。ぬしのご主人は主様の、と様であろ。」

「小生のご主人はご主人だよ。」

「なにゆえ。」

「犬嫌いなご主人だけど、小生を嫌っちゃいないから。」

「ぬしだけ特別扱いか。」

「お前さんもだろ。」

「…主様は動物アレルギーだったな。」

「ほらな。」

「お前さんは小さいな。」

「猫だからよ。」

「ご主人は小さいのが好きなのか？」

「ちっぱいも好きだと言っておった。」

「わふ。」

「丸くなって我の真似か。」
「ご主人に好かれるなら、それでも構わんさ。」
「暗め。」

「また小生の飯をひっくり返しただろう。」
「はて何のことか。」
「流石に怒ったぞ。」
「ひひひ。」
「…。」
「もっと何か言うてみせ。」
「…。」
「あ奴め、黙ったまま散歩に行きおった。」

「…。」

「暗を怒らせてしまったようよ。」

「…ちとやり過ぎてしまったかもしれぬ。」

「…。」

「…一匹(ひとり)で喋るのは、寂しい。」

「…。」

「のぁん。」

「のぁんのぁん。」

「泣きながら鳴いてどうしたんだ。」

「ぬしが教えたのであろ、遠吠えよ。」

「仲間は来たか？」

「主様が帰って来てくれた。」

「そこは嘘でも小生が来てくれたと言うべきだろう。」

「死んでも嫌よ。」

「なぜじゃ。」

「ご主人は今日も絡繰とにらめっこか。」

「我は先ほどもふもふされた。」

「ずるいぞ。」

「ひひひ。」

「ご主人、早く小生に気付いとくれ。」

「へぶしゅっ！ずび…ご飯だ、おいで。」

「わふ！」

「のぁん。」

（またひっくり返す気だな）

（しかしこれではひっくり返せぬ）

（なるほど、皿と皿がくっついているな）

（落ち着いて食らいやれ、我の皿にドッグフードが入ってしまう）

（ふごふごふご）

## ラ・フランスの動物愛護。（後書き）

家では猫飼ってます。

元ネタは２ｃｈの何かのコピペだった気がしますが、記憶力の無さで思い出せません。ｏｒｚ

鳴き声ですが、にゃあ、って鳴く猫が身近に居ません。

のぁん、とか、のゎん、と鳴いてるのがいるので、参考にしました。

## リクエスト1（前書き）

PandoraHeartsより、
ブレイク×レイム

## リクエスト1

「っの、バカ！！」

振りかぶった手を机に叩きつければ、ハラハラと数枚の書類が落ちた。

どれもこれも全て、ブレイクの仕事だ。

あいつ、目が見えなくなったのを良いことに

今まで溜め込んできたのも押し付けているんじゃ…？

ふと脳裏を過った考えは、恐らく間違ってはいないだろう。

なぜなら、今ちょうど拾い上げた書類には、半年以上前の日付があったから。

「〜〜〜ッッ！？バカか！！」

「さっきから、そればかりですネ。」

棒付きキャンディを口に含んだザクスが、机の下から這い出てきた。

「ヨイショ、っと。」

「…まさか、ずっとそこに居たのか？」

「マサカ。君が諦めて出て行くのを待って居たんでス。」

ふぅ、やれやレ、と肩を竦めてみせるザークシーズ。

だが、ここは私の部屋だ。

「…邪魔でもしに来たのか。」

眉を顰めると、盛大に溜息を吐くザークシーズが目に入った。

「バカは君の方ですネ。」

思い切り鼻で笑われ、文句の一つや二つやいっそ十くらい言ってやろうと近寄ると

ふわりと甘い匂いがした。

けれど、それは、今さっきブレイクが舐めていた棒付きキャンディとは違う香だった。

「…カップケーキ？」

「よく、分かりましたネ。」

パチクリ、と目を瞬かせるブレイクは、バツが悪そうに紙袋を背中の方に隠す。

「…休憩しよう。」

「ハイ？」

「お茶にすると言ったんだ。」

（どうせそのつもりで来たんだろう？）

日も落ちて、どう考えたってティータイムには間に合っていないけれど、

私たちは書類を放り出してテラスに出た。

「良い香りですヨ。」

私の淹れた紅茶を緩んだ表情のザークシーズが見つめる。

「カップケーキは？」

「もう食べちゃいましタ。」

「嘘だな。」

「…美味しくありませんヨ。」

「食べてから決めれば良いことだろう。」

妙だ。

お気に入りのお菓子を持ってくる奴ではないし、

そもそもここで出るお菓子に不味いものはないはず。

「…手作り…いや、まさか。」

流石に無いだろうと首を振りつつザークシーズを見れば、目を逸らされる。

「…え。」

「食べたきゃ食べれば良いデショウ！！」

カップケーキの一つを思いっきり口に突っ込まれ、むせ返る。

「ぐふぁっ、ん、ぶ…ざくふ、…！」

中に入っていた生クリームが舌の上でとろけ、喉の奥に滑り落ちる。

ごくっ…ん

私は口を、ザークシーズは手をクリームまみれにして、騒がしいお茶会が始まった。

「…美味しい。」

「お世辞は結構デス。」

「人がせっかく褒めてるのに…！」

「褒めて欲しいなんて言いましタっけ？」

ふん、とそっぽを向くザークシーズ。その手にはカップが包まれていて、

傷付いた指先を温めているようだった。

切り傷か何か、更に軽めの火傷と打撲。

カップケーキを作るのに払った犠牲は、どうやら少なくないらしい。

分かり辛いけれど、恐らくは私を休ませに来てくれたんだろう、

そう思うとなんだか笑えて来た。

だって、あの、ザークシーズが手作りカップケーキを持って私の部屋に来るなんて。

「どうしたんデス？ニヤニヤして。」

「なっ、ニヤニヤなんてしていない！それより、クリームが付いているぞ。」

ひょい、とザークシーズの口元のクリームを指で掬い取る。

「あー、だめデス。」

私の手を取り、ザークシーズはそう言った。

ぱくっ

何が、と口を開く頃には、私の指はクリームごと奴の口の中。

「な、…」

頭が追いつかない。

（ザクスが私の指を、舐、め…てる？）

ざり、とした舌の感触に、ようやく我に返る。

「…ザークシーズ貴様ッ！！」

腕を思い切り引いているのに、全く動かない。

指から伝わるザークシーズの舌は、やけに熱っぽかったような気がする。

クリームを舐め終えたザークシーズが、ようやく口から私の指を解放した。

ちゅ

と、指先にキスをして、

「ご馳走サマ。」

「ば、バカザクス！！」

「俺は何も見ていない、俺は何も見ていない、俺は――」

「やぁ、ギルくん。…何を、見たんデス？」

茶会も過ぎた真夜中、ギルバートの悲鳴が響き渡ったという。

（オズを探してただけなのに！）

## リクエスト1（後書き）

このように、リクエストして貰えれば、大体書きます。

して下さいな。m（＿＿）m

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9874x/

ロークァットは二度笑う。

2011年11月7日09時03分発行